

「死」は、私たちいのちあるものにとって、最大の謎であるといえるでしょう。

「死」は、「私^{わたくし}」という存在がなくなることです。これはもう、ほんとうに空^{そら}恐^{おそ}ろしい気持ちになってしまいます。この空恐ろしい「死」に対して、私たちはどのような態度をとるのでしょうか。

多くは、「見ない」という態度をとると思います。「普段は忘れている」という言い方でもいいでしょう。そうして、目の前のさまざまな事に、気持ちを集中して、考えないようにしているというのを、第一の態度としましょう。

この第一の態度の難点として、実際に「死」が迫ってきた時、普段見ずに忘れていた分、慌^{あわ}てふためいてしまうことがあげられるでしょう。

第二は、「死」について、徹底的にこだわって考え抜く、という態度です。哲学的な態度といってもいいと思います。「死んだらどうなるのか?」「来世^{らいせ}はあるのか?」「魂^{たましい}は不滅^{ふめつ}なのか?」というようなことなどを、追求し、答えを見いだそうとします。

この第二の態度は、第一の態度に比べ、いのちへの深い洞察が得られるでしょう。

しかし、難点をあげるとすれば、死という答えのない証明不可能な問題の結論にとられすぎるため、現在の自分の生き方をないがしろにしてしまう危険性があることです。

さて、この二つの態度のいずれもとらず、第三の態度を示した方がいます。それはお釈迦さまです。お釈迦さまは、自分が死んでしまうという問題を深く考え、その解決のために出家をされました。これは、第一の「見ない・普段は忘れている」という態度とは正反対です。

死について深く考えたのだから、第二の態度かということ、少し違うのです。

確かにお釈迦さまは、死について徹底的に考えました。しかし、考え尽くした果てに、結論を保留にするのです。なぜなら、それは死んでみなければわからない、証明できないことだからです。死とは何かという結論を探す前に、自分自身の生き方を問題にしました。煩惱^みという毒^{こころ}が、身と心をむしばまないような生き方に気づき、実践することを最優先にしたのです。

私たちは、いつかは死ぬのですから。死ぬ存在だからこそ、より善^よきいのちを生きることが大切だということ、そして、むしろ死を、私たちのいのちを照らす光とすることを、お釈迦さまは示されたのです。